

# よりよき社会をめざして



土木学会 第106代会長  
小林 潔司

皆さま、新年を迎え心新たに期待と抱負を膨らませておられることと思います。謹んで新春のお慶びを申し上げます。

かつて、法の精神を著したモンテスキューは、「目的の港をもたない船には、どのような風も役に立たない」と述べました。現在、ビッグデータやAI、自動運転など、さまざまな新しい技術が発展しています。これらの技術は、さまざまな個人や企業の活動の合理化に貢献しています。しかし、これらの要素技術だけでは、社会がどういう港に向かって進んでいるのかはわかりません。これらの技術を駆使し、よりよき社会の実現をめざして努力するのが土木技術者です。

インフラは、われわれの社会・経済を支えるとともに、社会のフロンティアを拡大し、新しい生き方や多様な生き方を実現します。さらに、将来のよりよき社会のために、重要な遺産を残すことにもつながります。われわれは、将来の人びとがどのような価値観をもつのかを予測することはできません。しかしながら、われわれは、将来のよりよき社会について、どのようなビジョンをもっているのかを示すことは可能だと思えます。私自身も浅学非才の身ながら、毎週、土木学会の会長

情報発信プロジェクトWEBページに私見を綴っております。

よりよき社会は、当然のことながら安全で安心な社会でもあります。今年も、わが国をはじめとして国際社会は多くの災害にみまわれきました。改めて、社会・経済や人びとの生活を守るためのハード・ソフトのインフラの必要性が明らかになりました。日本が蓄積してきた災害に対する知恵や経験、土木技術は、国際社会に対して多くの貢献ができると思います。このような観点から、アメリカ土木学会と共同でインフラ強<sup>きょうじん</sup>化のための国際的な評価枠組みや方法論の開発に関する会長特別タスクフォースを立ち上げました。米国の国際的プラットフォームを通じて、わが国の災害対応技術を世界に理解していただくと同時に、わが国の技術水準のさらなる高度化に資すればと考えております。

土木学会は、インフラ整備を通じて、よりよき社会を実現するための自己研鑽を積み場であります。学会活動を通じて、インフラ整備に対する「志」と「熱意」をもち、国内外の舞台で活躍できる、多彩な人材が輩出されることを期待しています。今年もまた、会員各位の土木学会に対するご支援、ご努力に対して敬意と感謝を表したいと思えます。